

博士（農 学） バルジンニヤム マイツェツエグ

学 位 論 文 題 名

# 「市場経済」移行期における 食肉流通構造の変貌に関する研究

—モンゴル・ウランバートル市の食肉卸売市場を中心に—

## 学位論文内容の要旨

本論文は、旧社会主義国であるモンゴルの食肉市場を対象に、社会主義時代の「計画経済」から「市場経済」への移行に伴う構造的変動、特に流通構造の変化に焦点を当てて、社会科学的・経済学的視点から明らかにしたものであり、序章、終章を含め都合5章からなる。

まず、序章では、既存研究を整理し研究の課題と視点を整理した。「市場経済」以降後、モンゴル経済に関する研究は数多くなされてきたが、そのほとんどはマクロデータに基づくもので実態調査等を踏まえた研究はほとんど見あたらない。国民経済上も、国民食料消費上も極めて重要な位置を占める食肉についても事情は同じである。こうした状況を踏まえつつ、本論文ではモンゴルで最大規模を誇るフチト・シヨンホール食肉市場を主な対象にしなが、食肉の卸売市場流通を実態的に解明することを課題として設定した。

第一章「モンゴルの市場経済化に関する政策展開と食料消費の変化」では、モンゴルの食肉流通構造に大きなインパクトを与えた政府等の「市場経済」化政策を時系列的に整理するとともに、家畜私有化や食肉を含む食料品の価格・流通自由化政策の展開の特徴を概観し、その諸結果について考察した。家畜私有化に伴い食肉生産者は農牧業協同組合から独立自営の遊牧民に変わり、食肉生産も政府の指令に基づく生産から遊牧民の経済的再生産を基軸とするものに変化した。また、「市場経済」化が急速であったこともあり、食肉流通は混乱し価格も高騰傾向が見られ、国民、特に都市域に住む国民の食肉消費は減少傾向を辿ってきたのである。

第二章「モンゴルにおける食肉生産と流通構造の変化」では、「市場経済」化以降の食肉生産と流通構造の変遷を検討した。家畜飼養面で特徴的なことはカシミア生産のためのヤギの飼養が特段に伸びてきたことであり、それは食肉の安定的・拡大的生産という面から見れば否定的に評価せざるをえない現象といえる。また、食肉流通面では社会主義時代の調達システムが解体した後、社会主義時代を引き継ぐ食肉加工工場流通の傍らに自然発生的に「担ぎ屋」的な食肉仲買人等を担い手とする流通が発生し、次第に後者が拡大し、今や前者と並ぶとシェアを確保するところまできているのである。

第三章「食肉卸売市場の形成過程」では、モンゴル最大の食料市場であり、卸売機能にますます特化しつつあるフチト・シオンホール食料市場を対象に、その形成過程を分析した。フチト・シオンホール食料市場は「市場経済」化の下で、食肉取扱比率を高め、また、次第に小売機能を失いつつ、食肉卸売市場に特化してきた。それは同時に、食肉仲買人の機能分化、すなわち、もっぱら市場まで食肉を運搬する「地方仲買人」ともっぱら市場内で卸売業務に当たる「市場内仲買人」への分化、更に地方仲買人の多段階的分化(例えば、地方都市まで運搬し販売する仲買人、地方都市からウランバートル郊外のと畜場まで運搬し販売する仲買人、と畜場からフチト・シオンホール食料市場まで運搬し販売する仲買人など)、を伴うものであった。仲買人の多段階的分化という点では流通、特に物流の「合理化」が進展していると言えるが、しかし、価格形成面から見れば、相対取引が圧倒的多数で、極めて恣意性・偶然性が強く、「一物多価」的な状態にあり、未だ「形成途上」的水準に止まっていると評価せざるをえない。

最後に終章「総括と展望」では、以上の分析を総括するとともに、モンゴルの食肉市場・流通の今後のあり方、方向性に関して若干の考察を行った。

検討してきたように、フチト・シオンホール食料市場は「市場経済」化の中で、次第に卸売市場的機能を備えながら、モンゴル最大の食肉卸売市場へと成長してきた。その中で、特に気がかりなのは、多数の「地方仲買人」や市場に買い出しに来る小売業者が未だ零細な規模に止まっているのに対して、「市場仲買人」が少数化と大規模化の道を進んでいることである。その行き着く先が、遊牧民の再生産費用に見合う「公正」な価格形成に向かうのであれば問題は少ないが、再生産費用を無視した水準での価格形成に向かうのであれば、大きな問題と言えよう。それは、食肉供給は大きな不安定性をもたらすと考えられるからである。こうした方向への転回を避けるためにも、モンゴル食肉協会が政府に要請している産地での公設セリ市場の設立を産地に止めず消費地にも設立し、一定の客観性を持った「指標価格」的なものが形成・公表されることが望まれよう。また、公正な取引を補完するものとして、国家による備蓄なども考えられて良い。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 飯 澤 理一郎

副 査 教 授 黒 河 功

副 査 助 教 授 志 賀 永 一

学 位 論 文 題 名

## 「市場経済」移行期における 食肉流通構造の変貌に関する研究

—モンゴル・ウランバートル市の食肉卸売市場を中心に—

本論文は5章からなる、図9、表28、文献42を含む頁数86の和文論文であり、別に参考論文3編が付されている。

本論文は、旧社会主義国であるモンゴルの食肉市場を対象に、社会主義時代の「計画経済」から「市場経済」への移行に伴う構造的変動、特に流通構造の変化に焦点を当てて、社会科学的・経済学的視点から分析・考察したものである。

序章では、既存研究の整理を行い、研究の課題と視点を設定している。モンゴルにおける「市場経済」化は1991年を転機に本格化するが、以降のモンゴル経済に関する研究は実態調査等を踏まえないマクロデータに基づく分析がほとんどであり、本研究が対象とした食肉市場もその例外ではない。しかし、「市場経済」化に伴う経済的混乱が未だに続く中であって、マクロデータに対する信憑性は著しく損なわれているため、それに頼り過ぎた研究には問題が多いと言える。こうした状況を踏まえ、本研究では、モンゴルの食肉市場の構造的変動を克明な実態調査を通じて解明することを課題として設定している。

第1章では、モンゴルの食肉流通構造に大きなインパクトを与えた一連の「市場経済」化政策を時系列的に整理するとともに、家畜私有化や食肉を含む食料品の価格・流通自由化政策の展開の特徴を概観し、その諸結果について考察している。モンゴルの「市場経済」化は数年のうちに一気に推し進められた。それは全面的な「私有化」と「取引・価格の自由化」と特徴づけられる。食肉生産面では、家畜私有化に伴って生産者が農牧業協同組合から独立自営の遊牧民に変わり、政府の指令に基づく生産から遊牧民の経済的再生産を基軸とするものに変化した。また、「配給」的な流通から「自由」な流通に変わり、食肉市場・流通は混乱し、価格高騰傾向も見られ、国民、特に都市域に住む住民の食肉消費量は減少傾向を辿ってきているのである。

第2章では、「市場経済」化以降の食肉の生産及び流通構造の変遷を検討している。家畜飼養・食肉生産面で特徴的なことはカシミア生産のためのヤギの飼養が特段に伸びてきたことであり、それは遊牧民の経済的再生産という面からすれば肯定的なものであっても、食肉の安定的・拡大的生産という面からすれば否定的に評価せざるをえない現象である。また、食肉流通面では社会主義時代の調達システムが解体した後、社会主義時代を引き継ぐ食肉加工工場流通の傍らに自然発生的に「担ぎ屋」的な食肉仲買人等を担い手とする流通が発生し、次第に後者が拡大し、現在では前者と並ぶシェアを確保するところまできているのである。

第3章では、モンゴル最大の食肉市場であり、卸売機能にますます特化しつつあるフチト・ションホール食料市場を対象に、その形成過程を分析している。フチト・ションホール食料市場は「市場経済」化の下で、食肉取扱比率を高め、また、次第に小売機能を失いつつ、食肉卸売市場に特化してきた。それは同時に、食肉仲買人の機能分化、すなわち、もっぱら市場まで食肉を運搬する「地方仲買人」ともっぱら市場内で卸売業務に当たる「市場内仲買人」への分化、更に「地方仲買人」の多段階的な分化を伴うものであった。仲買人の多段階的分化という点では流通、特に物流の「合理化」が進展していると言える。しかし、価格形成面から見れば、相対取引が圧倒的多数であり、極めて恣意性・偶然性が強く、「一物多価」的な状態にあり、卸売市場としては未だ「形成途上」的水準に止まっていると言える。

終章では、以上の分析を総括するとともに、モンゴルの食肉市場・流通の今後のあり方、方向性に関して若干の考察を行っている。今後の食肉市場・流通のあり方と関わって提案されている政策的な諸課題は、1)公設の卸売市場・価格形成センター等の設置による基準的な価格の形成、2)価格・取引などに関する情報の伝達システムの整備、3)気候変動等に伴う供給変動、特に供給不足に対応する公的機関による備蓄システムの構築、である。

以上のように本研究は、「市場経済」移行期におけるモンゴルの食肉市場の構造的変貌を、主としてフチト・ションホール食料市場の克明な実態調査に基づきながら検討し、市場の担い手＝仲買人等の分化過程及び取引態様の諸特徴・諸問題を析出するとともに、今後のあり方に関する若干の提言を行っている。この成果は、モンゴルあるいは食肉市場だけに止まらず旧社会主義諸国、発展途上国の「市場経済」化に関する研究に対しても示唆に富むものであり、学術的貢献は大きい。よって、審査員一同はバルジンニャム マイツェツェグが博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。